

君羅先生ありがとうございました

言語センター教授 江 口 修

君羅先生と初めてお会いしたのは、昭和五十三年の十月のことだった。フランス語担当で、いわば直属の上司とも言うべき目黒士門先生、目黒先生と同じく東北大学の先輩で外国文学とドイツ語を担当なさっていた中川勇次先生やゴーリキー研究で著名な松本忠司先生とは酒を介してたちまち親しく接していただけるようになったが、英語の先生方とはあまりお話しを伺う機会はなかった。授業のある曜日が今と同じく異なっていたこともあった。だが親しくしていただいた三先生をはじめ、駆出しのまだ実績もない若造からみれば綺羅星？いや巨星連連と輝き、遙か仰ぎ見ては佇むのみといったところであった。やがて覚悟していたとはいえ、冬が来た。想像を超える寒さと雪だったが、君羅先生だけは「寒いですね」とおっしゃりながらも平然と構えていらした。聞くとなんと足寄のご出身、当時全盛を極めていたフォークのシンガーソングライター松山千春と同郷と知って急に親しみを勝手に覚えた。先生は弘前大を出られ東北大大学院に進まれた先輩にあられるのだが、残念ながら大学でお見かけしたことはない。ここで、少し当時の東北大学の様子を語っておくのも悪くはなからう。当時は大学紛争の余燼まどくすぶる中、学部と教養部は截然と分たれており、先生の属された文学部大学院は帝国大学の雰囲気を湛えた片平キャンパスにあったがバリケード封鎖の後片付けが続いていた。昭和44年に入学した拙生などは、駐留米軍の残したチャペルや蒲鉾型兵舎をまだ利用する川内キャンパスで大学生活を始めた訳だが、学部三年目だけ片平で過ごし、四年目以降は移転で再び川内に戻った。当時文学部では英文科は修士卒業で研究職や教職につけた時代で博士課程は名ばかりのものだった。そして英文科の王道はシェークスピアであった。君

羅先生は「高校で、なぜかシェークスピアを読みなさい」と勧められてです... 大学では英文科に直行。その後ずっとシェークスピア一筋。普通多くの方はシェークスピアを〈卒業し〉他の方面へと向かわれるのですが、私は卒業できずにシェークスピア留年生というわけです」と『ヘルメス・クーリエ』で述べられているが、正しくは王道を歩み続けられたと言うべきだろう。天井の高い重厚な校舎で中庭を持った修道院のような片平キャンパスですれ違ったかも知れない先生の若いお姿を想像するのは楽しい。

一冬を乗り切り遅い春が来るとあっという間に夏が来た。当時はまだ大学で教職員のリクレーション大会が盛んに行われていて、あらゆる種目で君羅先生は教員チームの中心に居られた。私も誘われるままへまばかりやって笑いを取る専門家になっていたが、そのうち先生から「北大法学部と野球の定期戦があるのですが出ませんか」とお誘いを受けた。まだまだ野球をやる雰囲気は残っていた。4番でキャッチャーの君羅先生とスパイクを履きユニホームをぱりっと着こなされた今は亡き秋山先生のバッテリーは戦後昭和の雰囲気を濃厚に漂わせていた。野球の後の懇親会ではビールをひたすら賞味なさる先生だが、その後は二次会よりも中国生まれの4人で卓を囲むゲームに興じるほうがお好きなことも知った。その他先生は、自然豊かな地に育てられたためか、山菜採りや釣りなども商大きっての通であられることも徐々に知った。テニスもそのうちご一緒するようになったが、イメージャリーを中心にしたシェークスピア研究にも自然の中で鍛えられたその鋭敏な五感が活かされているのではと考えるのは決して的外れではないだろうと確信している。

さて、最後に君羅先生の本学の外国語教育へのハードそしてソフト面での多大なご貢献を語っておかねばならない。本学では北海道はもとより全国でも先んじてLL教室を導入したが、それは英語教育のニューメソッドの実践を確かなものとするためのものだった。これが発展して当時の言い方で省令施設としての言語センター設立へと発展していくのである。最初の8年は拙生がセンター長、君羅先生が副センター長という体制で進んだ言語センター

だが、その後6年の長きにわたり全学の意思として君羅先生センター長体制が続くことになる。だが実質は最初から君羅先生がセンターの運営を実際に切り盛りされておられたのである。アナログ時代のオーディオ機器から現在のデジタル機器によるシステム構築に至るまで先生は外国語教育のハード面を設計から支えられてこられた。ソフト面でも英語教授法の研究にもご熱心で言語センターの発展に多大な貢献をされた。先生はゼミナール教育にも熱心で、多くのゼミ生が現在英語教師として活躍していることは喜ばしい限りである。これからも健康にどうか留意されて、引き続き後進たちにアドバイスを頂けるようお願いして君羅先生への謝辞としたい。どうも長い間ありがとうございました。